なぜ大学にチャペル・アワーが必要なのか

越 川 弘 英

奨励者紹介〔こしかわ・ひろひで〕
同志社大学キリスト教文化センター教授
〔研究テーマ〕キリスト教の実践神学（礼拝、宣教、牧会）

神よ、わたしを憐れんでください
　御慈しみをもって。
深い御憐れみをもって
　背きの罪をぬぐってください。
わたしの咎をことごとく洗い
罪から清めてください。

あなたに背いたことをわたしは知っています。
わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。
あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し
御目に悪事と見られることをしました。
あなたの言われることは正しく
あなたの裁きに誤りはありません。

わたしは咎のうちに産み落とされ
母がわたしを身ごもったときも
　わたしは罪のうちにあったのです。
あなたは秘儀ではなくまことを望み
秘術を排して知恵を悟らせてくださいます。
ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください
　わたしが清くなるように。
わたしを洗ってください
　雪よりも白くなるように。
喜び祝う声を聞かせてください
あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように。
わたしの罪に御顔を向けず
咎をことごとくぬぐってください。

神よ、わたしの内に清い心を創造し
新しく確かな霊を授けてください。
御前からわたしを退けず
あなたの聖なる霊を取り上げないでください。
御救いの喜びを再びわたしに味わわせ
自由の霊によって支えてください。

わたしはあなたの道を教えます
　あなたに背いている者に
罪人が御もとに立ち帰るように。

（詩編 51編3―15節）

『哲学しててもいいですか？』

先日、新聞を読んでいて、信州大学准教授の三谷尚澄さんの『哲学しててもいいですか？―文系学部不要論へのささやかな反論―』という本の書評が出ていたのを読みました。書評を書いたのは、東京大学の野矢茂樹さんという方ですが、哲学を専門としておられる方のようです（朝日新聞 2017年4月9日付 朝刊 12頁）。

ご存知の方も多いでしょうが、文部科学省は昨年、文系や人文社会学系の学部は廃止もしくは再編して、社会的ニーズの高い学部や学問に衣替えしろという主旨の提言を出しました。当面は国立大学向けのものですが、遅かれ早かれ私学にもそういった影響が及んでこないとは限りません。

書評を書かれた野矢先生は国立大学の代表とも言うべき東京大学で、しかも哲学というまさしく文系ばりばりの教員の方ですが、この文科省の通達に関連して、次のように書いておられます。

「哲学教育が大学から追いやられようとしている。私も哲学の教師として、困ったことだと思っている。（略）

文科省は、とりわけ人文系の学部に対して、これを学べばどういう職業的技能が身につくのかを明確にせよと求めてくる。それがはっきりしない学部は、より社会的要請の高い分野に転換しろと言うのである。

文科省は学生を鋳型にはめようとしている。そしてあなたの学部ではどんな鋳型を提供しているのですか、と問うてくる。他方、哲学は鋳型そのものを考え直し、論じようとする。自分たちがなじんだ考え方に新たな光を当て、他の考え方の可能性を探ろうとする。だから哲学は学生を鋳型にはめる教育にはなりえないし、まさにそこにこそ、哲学教育の生命線がある。

こわいのは、学生たちの多くもまた、鋳型にはめてもらいたがっているということだ。いまの我が国は、国民に考えさせず、一方的に決めつけようとする。ところが国民の側からも、決めてくれた方が考えなくて済むから楽でいいといわんばかりの声が聞こえてきはしないだろうか。

そんな時代に、哲学教育が果たすべき役どころはむしろ大きい」。

大学教育のめざすもの

この文章にいろいろと思いあたる方もおられるのではないでしょうか。

同志社大学に学ぶ学生が、文系や理系にかかわらず、哲学を含めて広く一般教養科目を学ぶことが求められるのは、多様な価値観、多様なものの見方や思想に出会い、そうしたものをさまざまなかたちで批判し、吟味しながら、自分自身を形成し、ひいてはそうした人々が未来の新たな社会、世界を形成していくことを願ってのことであると私は理解しています。豊かな人間性と多様なものの見方・考え方を身につけた上で、つまり成熟した人間としてのバランスを備えた上でこそ、高度な専門的知見や技能はほんとうの意味で役立つものになるのだと思います。

そうした成熟した人間性を培うためには、いろいろなことを自由に学ぶことのできる環境が必要です。まじめに議論し切磋琢磨するような人間関係、仲間、友人が必要です。そしてまた一定の無駄とも思われるような時間が必要です。お酒が樽の中で何年も寝かされて熟成するように、人間が人間になっていくためには、直線ではない回り道や道草、成熟するための贅沢で貴重な時間が欠かせないのです。

ところが、現代はそうした熟成ということが許されず、短時間で大量に成果を生み出すような教育が求められるようになってきました。文科省が強調するような「社会的要請」という言葉によって、そうした「要請」に見合った人間を、まるで工場で生産するようなイメージで「製造」することが要求されている印象を受けます。以前、同志社でも話題になりましたが、学生の皆さんを「人材」と呼ぶか「人物」と呼ぶかということは決して些細な問題ではありません（人間は「資材」や「材料」ではないのです）。

大学教育の目的はただ単にそうした「社会的要請」という言葉を鵜呑みにする人間を育てることではありません。哲学が「自分たちがなじんだ考え方に新たな光を当て、他の考え方の可能性を探ろうとする」のと同様、大学教育の中には、そうした「要請」の本質は何か、そこで「社会」と呼ばれているものの実態は何かということを、いろいろな視点や次元から吟味し洞察する力を養うことが含まれていなければなりません。

「社会的要請」の実例から

「社会的要請」、そしてそれに応える教育が常に正しいのか、そして私たちを含めて多くの人々をほんとうに幸せにする方向に通じているかどうかということは、決して自明のことではないと思います。

これについて、わかりやすい例を一つ二つ挙げましょう。

つい70年ほど前まで日本の教育の根本にあったのは「教育勅語」の中に表現されていた理念でありました。「教育勅語」の中核を成す「社会的要請」とは、結局のところ、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」という一文に凝縮されているところの理念です。つまり、「何か一大事が生じることがあれば、公のために奉仕し、永遠普遍の皇室を助けるものとなれ」ということでした。天皇を主権者とする臣民教育という「鋳型」であり、天皇中心の国家のための教育を行うこと、それが当時の「社会的要請」でした。それがどういう結果を迎えたかは歴史が教えています。

他方、現在における「社会的要請」の最たるものは、経済至上主義とも言うべき理念を前提に、「企業に役立つ人間」「生産性の高い人材」を作り出すことではないかと思います。今日、私たちが頻繁に耳にする言葉の一つは「経済効果」という言葉であり、あるいは「コストパフォーマンス」であったりします。私は、大学で学ぶのは自分自身に「付加価値」を付けるためだと言い放った学生がいたことを覚えていま

す。「より高い売り物になるためだ」ということでしょうか。けれどもそうやって大学を出たばかりの若者が、がんばってがんばって会社や組織のために働いて、そのあげくに過労死したり、心身の病におかされたりして、この世界から脱落していく結果をもたらすとしたら、今の社会が求めている「要請」というのは、やはりどこかおかしいのではないでしょうか。

古代のキリスト教と異教の「鋳型」（1）

ところで、矛盾するように聞こえるかもしれませんが、私は先に引用した野矢さんの用いていた「鋳型」というものについて、それ自体が悪いとか不要であるとは思っていません。私たちが生きていく際の拠り所あるいは共通のモデルとして、「鋳型」はそれなりの役割を果たす面があります。問題はそれがどういう「鋳型」なのかということなのです。

「鋳型」という表現は、この場合、人間を一定の形やパターンにはめ込むという意味合いで使われているものでしょう。私が言いたいのは、そういう「鋳型」にもいろいろなものがあり、人間や社会を形成していく上で「より望ましい鋳型」もあれば、「望ましからぬ鋳型」もあるということです。

大切なことは、この世には実はいろいろな「鋳型」があるという事実をまず知ることであり、次にそうしたいろいろな「鋳型」の中で自分が最も望ましいと思う「鋳型」、これこそ本物だと信じられる「鋳型」を選び取り、主体的にその「鋳型」に向き合って自分を形作っていくことだろうと思います。

こうした「鋳型」の果たす役割について、最近、私が学んだキリスト教の初期の時代のエピソードをご紹介しながら、少し具体的にお話ししてみます。

紀元165年、そして251年。ローマ帝国は2度にわたって大規模な疫病（天然痘？）の猛威にさらされました。ある研究者は、この疫病で、当時、6000万人と推測されるローマ帝国の人口の4分の1から3分の1が死滅したといいます（ロドニー・スターク 『キリスト教とローマ帝国―小さなメシア運動が帝国に広がった理由―』 穐田信子訳 新教出版社 2014年 99頁）。

この時代のキリスト教はまだ非公認宗教であり、しばしば迫害の対象となっていましたが、疫病の流行に際して多くのキリスト教徒が罹病した人々の看護に挺身しました。それは相手がキリスト教徒であるか否かを問わず、自らが疫病の犠牲になることも恐れずに行われた奉仕のわざでした。

このことについて、アレキサンドリアの主教だったディオニュシウスが書いた書簡が残っています。

「彼らは危険を顧みずに病人を訪れ、優しく介護し、キリストにあって仕え、そして、彼らとともに喜びのうちにこの世を去りました。この人たちは他の者から病気を移され、隣人たちの病を自らの側に引き寄せ、その苦痛をすすんで自分のものにしました。そして多くの者が、他の人たちを看護し癒したとき、その者たちの死を自分に移して自ら死んで行きました・・・・・・」。

続いてこの主教は、異教徒たち（キリスト教徒以外の人々）の振る舞いについて、こう書いています。

「異教徒たちの振る舞いはまさに逆でした。彼らは疫病に倒れたばかりの者さえ敬遠し、最愛の者たちから遠ざかりました。彼らは半死の者を路上に投げ出し、葬られていない死体を手ひどく扱いました」（同書 109頁）。

古代のキリスト教と異教の「鋳型」（2）

なぜこのような違いが生じたのかということを、ロドニー・スタークという学者は、それはキリスト教特有の教理と倫理から生じた結果であったと説明します。

つまりキリスト教は、それまでのローマ帝国の宗教と異なり、疫病を単なる不可抗力の災いとみなすのではなく、人間に与えられた「訓練と試練」の時として受けとめたこと、さらには疫病による死に関しても、死を超える神のもとにおける安らぎを信じ、それを「永遠の生命」への解放として受けとめたことが、こうした態度を生んだというのです。さらにキリスト教は、神は人間を愛しているという教理をもち、神に愛されている存在として私たち人間もまたお互いに愛しあうべきであるという倫理を教えました。イエス・キリストが罪人のために犠牲となり、自らの命を人々のために献げた姿が、キリスト教徒の模範となり、苦しむ人々のために奉仕する生き方を選び取るという倫理的行動へ導いたというのです。こうした教理と倫理の結合が、古代世界にあって他に見られないような自己犠牲を伴う生き方へと、キリスト教徒を押し出したという説明です。

こうしたキリスト教の教理と倫理が衝撃的だったのは、当時のローマ帝国における異教の神々が、およそ人間に対して愛をもって接するとか、弱い者、傷ついた者、小さな存在を大切にするという性格をもちあわせていなかったからだと言います。ギリシア・ローマの神話に登場する神々はむしろ、しばしば気まぐれや悪意をもって人間に関わる危険な存在でした。神々の恩恵と人間の献げ物は「ギブ・アンド・テイク」の感覚で、互いにバランスするのがせいぜいであり、人間は（今風に言えば）精一杯の「自助努力」をし、「自己責任」でやっていくしかないという考え方だったのです（このへん、実に現代社会の価値観やものの見方に似ていると思いませんか?）。

研究者によれば、キリスト教徒の働きで救われた異教徒たちがキリスト教に好意的な反応をもつようになるのは自然なことであり、死をも恐れないキリスト教徒の姿は人々に畏敬の念を起こさせたであろうといいます。そして実際問題としても、病者をケアしあう習慣をもっていたキリスト教徒の集団は、それをもたなかった異教徒の集団よりも、高い生存率を保ち得たはずであり、古代においてそれが一種の「奇跡」とみなされたとしても不思議ではなかったというのです。

私が言いたいのは、キリスト教と異教の優劣ということではなく、この時代、ギリシア・ローマの神々と宗教は人間のものの見方や考え方に関わる一つの「鋳型」を提供していたのであり、新興宗教であったキリスト教もまたもう一つの「鋳型」を提供したという事実です。同じ時代に二つの「鋳型」があって、それぞれの「鋳型」を受け入れていた人々がおり、それらの人々が疫病という破滅的な危機に直面した時、それらの「鋳型」の結果として、正反対の倫理的反応に至ったということを考えたいのです。

この場合、どちらの「鋳型」がより望ましく、どちらの方が望ましくないかということは、皆さん自身が考えることです。あるいはまた現代であれば、第3の「鋳型」、第4の「鋳型」などを想定し、それらの中から皆さんにとって望ましい生き方を促す「鋳型」を選択することがあってもいいと思います。

なぜチャペル・アワーが必要なのか（1）

さて以上のような話を踏まえて、そろそろ本日のテーマである「なぜ大学にチャペル・アワーが必要なのか」という問いに答えを出したいと思います。

私にとって、その第1の答えは、先ほどからの「鋳型」の話で述べてきたように、この世界にはいろいろな

価値観や多様なものの見方があるのであって、文科省であれ、「社会的要請」であれ、決して人間や世界を単純に画一化したり定義したりすることはできないのだということを示すためです。

キリスト教という宗教、聖書という書物は、この世界と歴史の中でおそらく最も多くの人々に関わりをもち、さまざまな経験と議論を積み重ねてきたものであると思います。キリスト教も聖書も実に多種多様な思想と実践を含んでおり、そこで提供されてきた「鋳型」というのも決して一種類ではなく、時代により地域により実に多種多様なのです。

こうした長大な時間と数知れない人々の思索と実践によって鍛え上げられてきたキリスト教と聖書は、たとえ皆さんがキリスト教徒になる・ならないに関わりなく、私たちが自分の人生を考えていく際の貴重な手がかりとなり、さまざまな気づきや励まし、あるいは慰めや勇気を与えてくれると思います。キリスト教も聖書も単純に「出来合いの答え」を私たちに押しつけようとしません。むしろいろいろな問いかけや働きかけをとおして、神は私たちの常識をひっくり返します。イエス・キリストをはじめとする聖書の人々は、私たちが思いもしなかった世界や人生の姿を見せてくれるのです。

そういうことからすれば、このチャペル・アワー、そして同志社のキリスト教教育は、ほんとうはとても複雑で、豊かで、不思議に満ちているこの世界と私たちの生を、もう一度取り戻そうという試みでもあります。そしてそういう意味において、このチャペル・アワーは、この世界を、画一的で、貧しい、薄っぺらなものへと歪曲し貶めようとする、この世の愚かしいさまざまな力の働きに対するプロテストであるとも言えるのです。

なぜチャペル・アワーが必要なのか（2）

さらに大学にチャペル・アワーが必要な第2の理由があります。それは私たち人間が弱く愚かな存在であり、間違いを犯し、悪を行う可能性をいつも秘めていることを忘れないようにするためです。

大学教育に限らず、おおよそ近現代の教育は人間の存在と能力に信頼を置き、教育をとおして人間を無限に成長させることができるという思想のもとで行われてきました。実はこれもまたある意味で近代の生んだ一つの「鋳型」なのです。

キリスト教は人間というものが神の前に「罪」を犯す存在であると説いています。聖書に拠れば、人間は皆、「罪人」です（「罪人」という表現がわかりにくければ、人間の「弱さ」、あるいは「愚かしさ」というふうに考えてもらってもけっこうです）。

聖書、とりわけ旧約聖書の大半は、人間の罪が引き起こす悲劇や葛藤についてこれでもかというほどに延々と記しています。人間という存在がその中に何か不気味な恐ろしい問題を抱えている生き物であることを聖書はよく知っているのです。

そしてそれにもかかわらず、神は私たち人間を愛し、私たち人間と共に歩んでくださる方であるとも聖書は語っています。私たち人間は完全なものではありえないのであって、そうであるからこそ、神の前に自らの破れを謙虚に認め、懺悔し、もう一度やり直すことの大切さをキリスト教は教えるのです。

今日読んだ詩編51編は典型的な懺悔の詩編として伝えられてきたものであり、罪を犯した人間がそれを悔い改める時に唱える祈りです。

「あなたに背いたことをわたしは知っています。
わたしの罪は常にわたしの前に置かれています」（5節）。

「神よ、わたしの内に清い心を創造し
新しく確かな霊を授けてください」（12節）。
「わたしはあなたの道を教えます
あなたに背いている者に
罪人が御もとに立ち帰るように」（15節）。

神という存在を前にする時、教師も職員も学生も皆、罪人であり、限界をもった小さな存在にすぎません。そのような私たちの現実を謙虚に見つめ、共に神の前に頭を垂れ、祈り、懺悔し、赦されて共に立ち上がる・・・。

キリスト教における教育はそこが出発点であり、この原点をないがしろにするならば、それはキリスト教教育とは言えないのです。この原点を共に確認するために、共に神の前に集い、共に祈るために、キリスト教主義に立つ同志社において、チャペル・アワーは欠くことのできない位置を占めています。

私たちが良く生きる者となるために、そしてこの世においてほんとうに良き働き手となるために、私たちはこの原点を大切にしたいと思うのです。

2017年4月12日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録